

# Gottes Werkzeug

~ Jakob Böhmes Menschen=anschauung ~

Yasuo OKAMURA

”Gottes Werkzeug“ bedeutet nun wörtlich das Zeug, wodurch Gott denn wirkt. Damit wir es verstehen können, müssen wir zuerst folgendes erklären. (1) Was ist überhaupt Gott? (2) Was ist denn sein Wirken ? (3) Was ist nun das Werkzeug? (1) Wir haben schon Ihn aus ”Ungrund“ : seinem Urstand vor der dreieinigen persönlichen Gott erläutert. Er wurde aus seinem Urgesicht als ”Spiel“ verklärt. Es ist die Wechseldurchdringung zwei Prinzipien oder die Zirkel-bewegung der sieben Eigenschaften. (2) Sein Wirken ist durch ”Gottes großes Spiel“ als Böhmes Schöpfungs-Lehre eingebildet. Ihre drei Wendepunkte sind als die Selbst-Schöpfung Gottes in Ihm selbst, als die Schöpfung der Engeln und als die dieser Welt. Wir sollen mitten in dieser Schöpfung = Handlungen als ”Gottes großem Spiel“ kämpfen, um die gründliche göttliche ”Temperatur“ auch wiederzuerstellen. Und (3) das nächste Thema zu erklären ist also Böhmes Menschen=anschauung als ”Gottes Werkzeug“.

Um ”Gottes Werkzeug“ zu werden, müssen wir ”alles für nichtig halten“, ”alle Dinge verlassen“, ”der Selbhiet absterben“ und ”ganz zur nichts weden“. Erst durch diese ”Gelassenheit“ oder ”Schweigen“ können wir ”von allen Dingen frey“ und ”Gottes Werkzeug“ werden. Wir können auch diese Situation symbolisch als ”das Rad in Ezechiel“ ausdrücken. Es ist ein ”Kugel=Rade, das auf alle Seiten geht.“ Das deutet nun ein anderes Leben als das christliche teleologische an. Wir sollen es auch ein freies ungründliches Leben nennen. In diesem eröffnet sich andere fremde Dimension desselben. Sie liegt weder innerhalb noch ausserhalb unser und also ist weder immanent noch transzendent. Darin werden wir endlich den Berührungspunkt mit dem buddhistischen Leben finden können

# 神の道具

～ヤーコプ・ベームの人間観～

岡村康夫

はじめに

「神の道具 (Gottes Werkzeug)」とは字義通り神が働く際の道具とするものの謂いであるが、それを理解するためには(1)「神とは何か」、(2)「その働きとは何か」、そしてまた(3)「その道具とは何か」ということを明らかにしなければならない。それらはそれぞれヤーコプ・ベームの(1)神観、(2)世界観、(3)人間観に相当するものであり、既に(1)は「神の戯れ (Gottes Spiel)」としての神の根源相から<sup>1</sup>、また(2)は「神の大いなる戯れ」としての創造論から<sup>2</sup>、それぞれ究明した。したがって、ここでは次に(3)「神の道具」としての彼の人間観を明らかにすることを追究課題としなければならない。

さて、先ず(1)ヤーコプ・ベームの神は、ドイツ神秘主義の流れに与するものとして単なるキリスト教的人格の神以前の神の「根源態」から説き起こされていた。そして、それは何よりも先ず「無底 (Ungurnd)」としての神であった。「無底」は「無にして一切 (ein Nichts und doch Alles)」<sup>3</sup>であると言われ、その具体相は先に明らかにしたように「二つの原理」の交互転入的關係であり、また「七つの性質」の円還運動であった。そして、それは喜びに溢れる「戯れ」として取り出せるものであった。それはまた「エゼキエルの車輪」、すなわち「あらゆる方向に進む丸い球形の車輪」<sup>4</sup>に譬えられていた。それはキリスト教的人格の神以前あるいは以上の神であり、ドイツ神秘主義の所謂「無 (Nichts)」としての「神性 (Gottheit)」に繋がる神の根源相であった。<sup>5</sup>

次に、(2)ベームは、そのような喜びに溢れる「戯れ」としての「永遠の至福」のうちにあった神が何故に動き、世界を創造しなければならなかったのかという問いを立てていた<sup>6</sup>。この問いのうちに、先の拙論ではベームの創造論を、すなわち最終的にはこの世界の創造に繋がる創造の三つの転回点を見た。それは①「無底」としての神の自己内創造であり、②「永遠なる自然」における天使の創造であり、③ルチフェルの墮落に続くこの世界の創造であった。それら

の三つの創造はそれぞれ「戯れ」として円還的動きを示していた。ただし、それらは閉じられた円還ではなく、神の「均衡 (Temperatur)」回復の動きのなかで、それぞれ新たな創造へと開かれた円還であり、謂わば「螺旋状 (spiral)」のものであった。神の働き、すなわちその創造行為はあくまで神自身の「戯れ」として、その自己内循環的動きのなかで喜びを増幅する以外のもではありえなかった。ただし、そもそも「戯れ」はその相対するものが拮抗するものであればあるほど、白熱し喜びを増幅するものとなる。①の神の自己内創造は勿論のこと、殊に②の天使の創造は神の自己投射、すなわち自己の対極に立つ者の創造を通して、喜びに沸き立つ新たな世界を創造することに他ならなかった<sup>7)</sup>。ただし、そこにはそれまでの完結的・円還的動きを破る者が出現する危険性があった。ルチフェルの出現がまさにそれであった。ただしまた、このルチフェルによって一旦破られた円還運動は、より一層大きな円還運動へと吸収され、さらに喜びを増幅するものとなっていくのである。それが③のルチフェルの墮落に続くこの世界の創造であった。<sup>8)</sup>

われわれはこの世界にあって、根源的には以上のような創造行為としての「神の大いなる戯れ」のなかにある。ただし、それはまたアダムとエヴァの楽園追放によって新たな局面を迎えている。すなわち、この世界は悪と禍に満ちた「嘆きの谷」となっているのである。しかし、更にまたこの世界に現出している様々な悪や苦悩も、根源的な神の創造行為の一局面と看做することができる。先の拙論で述べたように言わば直線的なキリスト教的目的論的志向も、その円還的・螺旋的動きの一部を切り取ったものと考えることができる。そして、そこからわれわれがこの世界で果たすべき責務も自ずと明らかとなる。すなわち、根源的均衡回復のために、苦悩や「闇」が大勢を占めるこの世界にあっては、それらを通して喜びや「光」を実現すべくわれわれは働くべきなのである。われわれは「今、ここ」で「戯れ」と呼ばれている神の創造に与する「創造的戦い」<sup>9)</sup>に参画すべきなのである。拙論は、以上のようなペーメの神および世界理解を踏まえて、再度(3)彼の人間観を明らかとすることを目的とする。<sup>10)</sup>

註

- 1 拙論「神の戯れ～ヤコブ・ペーメの神～」『山口大学哲学研究』第11巻53頁～74頁参照。
- 2 拙論「神の大いなる戯れ～ヤコブ・ペーメにおける『創造』の問題～」同上第12巻27頁～50頁参照。

- 3 *DE ELECTIONE GRATIE, Von der Gnaden=Wahl, oder Von dem Willen Gottes über die Menschen*, Jacob Böhme *Sämtliche Schriften*, XV, S.5 または『ドイツ神秘主義叢書 9 ベーメ小論集』（以下『ベーメ小論集』と略記） 藺田坦、松山康國、岡村康夫訳、創文社、1994年、165頁参照。
- 4 *MYSTERIUM PANSOPHICUM, oder Gründlicher Bericht von dem Irdischen und Himmlischen Mysterio*, Jacob Böhme *Sämtliche Schriften*, VIII, S.101 または『ベーメ小論集』10頁参照。
- 5 詳しくは前掲の拙論「神の戯れ」参照。
- 6 *DE INCARNATIONE VERBI, oder Von der Menschwerdung Jesu Christi*, Jacob Böhme *Sämtliche Schriften*, V, S.11
- 7 *THEOSCOPIA oder Die hochtheure Porte Von Göttlicher Beschaulichkeit*, Jacob Böhme *Sämtliche Schriften*, IX, S.169
- 8 詳しくは前掲の拙論「神の大いなる戯れ」参照。
- 9 Buber, Martin: *Über Jakob Böhme*, Wiener Rundschau, Bd.5 vom 15.06. 1901, S.251 ~253
- 10 拙論「神の大いなる戯れ」、49頁参照。

## 第一章 神の像としての人間

さてベーメは、人間にとってなによりも先ず有益で必要なことは「自分自身を学び知ること」であると言う。それは「人間とは何か」、「彼はどこから、あるいは誰から来たのか」、「彼は何のために造られたのか」、「その職務（Amt）は何か」ということを学び知ることである。そして、そのような真剣な観察のなかで、人間も含め「すべてが神から由来するということ」、「人間が最も高貴な被造物であるということ」、「いかに神が人間に心を向けておられるかということ」等が見出されると言う。そしてさらに、ベーメはそのような文脈のなかで、人間は何よりも「神の像（Gottes Bild）」としての自己を知ることができると述べているのである。<sup>1</sup>

ところで、ベーメの場合、「神の像」あるいは「神の似姿（Gottes Gleichniß）」と呼ばれるのは人間だけではなく、天使もそうであった。ただし、天使と人間とは登場する創造の局面が異なっており、そこには決定的に異なる原理が働いていた。すなわち、それはルチフェルの離反ののちに続いて起らねばならなかつ

た「もう一つの創造 (eine andere Schöpfung)」の局面であり<sup>2</sup>、その新たな局面を開く「第三の原理」の働きである<sup>3</sup>。ここではこのような創造の局面、あるいは「第三の原理」の働くところに位置づけられるベーメの人間観を究明するために、先ず「三つの原理 (drei Principien)」と、それによって開かれる「三つの世界」について明らかにしたい。

註

- 1 *DE TRIBUS PRINCIPIIS, oder Beschreibung der Drey Principien Göttliches Wesens*, Jacob Böhme Sämtliche Schriften, II, Vorrede, S.1~2
- 2 *AVRORA, oder Morgenröthe im Anfang*, Jacob Böhme Sämtliche Schriften, I, S.200~201
- 3 *Drei Principien Göttliches Wesens*, S.69~70

## 第一節 三つの原理と三つの世界

神の創造的世界展開のなかで「七つの性質」から「三つの原理」が生成し、そこに新たな創造の局面が開かれることについては既述した<sup>1</sup>。ベーメの場合、人間の創造は神の「大いなる戯れ」としての創造の三つの転回点の最終局面に位置づけられ、その存在はいわゆるキリスト教的目的論的動きへ積極的に参画すべきものとして意義づけられている。そういう位置づけあるいは意義づけが人間に与えられるのは、人間が「神の像」あるいは「神の似姿」として、根源的に神の大いなる創造行為の一端を担う重要な責務を与えられているからである。そして、このような神の創造的世界展開の動因となるものがベーメの「三つの原理」である。この点はまた神の根源相としての「神の戯れ」および世界創造論としての「神の大いなる戯れ」の叙述展開と重なるところもあるが、ここではその世界展開において重要な役割を果たす「神の像」としての人間観を明らかにするという観点から、再度「三つの原理」およびそれによって開かれる「三つの世界」について考究したい。

### (a) 三つの原理

さて、「三つの原理」はベーメのいわゆる神智学的思考展開の要となるものであり、彼の神、世界、人間についての考えを取り出すうえで欠くことのできない概念である。そして、最終的にはこの「三つの原理」すべてを自己のうちにもつものとして、人間は「神の像」あるいは「神の似姿」と呼ばれるのである。

### ①第一の原理

さて、「第一の原理 (das erste Principium)」は、そもそも「無底の中心」にある「無底的意志 (der ungründliche Wille)」が生まれ出るところに働く原理である。その性起は「魔術的 (magisch)」であり、それは「火 (Feuer)」と名づけられ、また「飢えにして渴望 (Hunger und Begehren)」と呼ばれる。それは「強烈な牽引 (strenges Anziehen)」とも呼ばれ、それによって「闇 (Finsternis)」が生成する。<sup>2</sup>

### ②第二の原理

ところで、「無底的意志」はこの「闇」のうちには留まり得ず、そこから自由であろうとして「光 (Licht)」を渴望する。この「光」を渴望するものが「第二の原理」である。しかし、「無底的意志」はまたそこで完全に「光」のなかへ上り切ってしまうこともできない。というのは、「光」への渴望が大きくなればなるほど、それだけまた逆に「闇」への牽引も強く、大きくなるからである。<sup>3</sup>

### ③第三の原理

この「第一の原理」と「第二の原理」との、すなわち「火」と「光」との交互牽引的な力関係のなかで「無底的意志」は「車輪」のように回転するものとなり、そのなかで「不安=生命 (das Angst=Leben)」が醸成される。そして、さらにまたその意志の「核心の中心 (Hertzens Centrum)」において「光」への渴望が生じ、この「不安」の只中あるいはその極点において、突如としてその「不安=苦悩」からの解放が性起する。それは「閃光 (Blitz)」を受けたような「驚き (Schrack)」であり、そこに「第三の原理」が出現する。この「第三の原理」によって「永遠なるものの顕示」が、すなわち「永遠なるものから外へ出る」ことが実現する。<sup>4</sup>

#### (b) 三つの世界

以上のような「三つの原理」すべてをもつ者として人間は「神の像」あるいは「神の似姿」と呼ばれるのである。例えば、パーメは次のように述べている。「ところで人間は三つの原理すべてをもたねばならなかった。彼は神の似姿であるべきであった。彼は(1)闇の原質であり、(2)また光の原質であり、そして(3)この世の原質であった。」<sup>5</sup>

このような「三つの原理」によって開かれるのが以下の「三つの世界」であり、またそのような世界に住む者として人間は三つの「原質 (Quall)」である。

### ①火の世界

「第一の原理」によって開かれる世界が「火の世界 (die Feuer=Welt)」である。その「火の世界」は「自然の中心 (Centurm Naturae)」から性起しており、またその「自然」は「渴望する意志」から性起しており、さらにそもそもその意志は「無底」において性起したものである<sup>6</sup>。この「第一の原理」はまた「闇の原質 (die Quall der Finsterniß)」と呼ばれ、それはそもそも「神の生誕の深み (die Tiefe der Geburt GÖttes)」<sup>7</sup>である。その「深み」において神は神自身を産み、その神の自己内産出のうちに「生命とすべての動きの起源 des Lebens und aller Beweglichkeit Urkund」がある<sup>8</sup>。

### ②光の世界

「第二の原理」によって開かれる世界が「光の世界 (die Licht=Welt)」である。この世界はその生命を先の「火の世界」から受け取っている。「火」である「第一の原理」は、それが「点火 (Anzündung)」される以前は「闇の世界」を創成していたが、まさしくまたその点火において「光の世界」を開くのである。そこで「火」は自己を自ら「光」へと分離し、しかもその「中心」は「闇」のうちに残す。というのは、そのようにしてのみ「火」は「生命の原因」でありうるからである<sup>9</sup>。

### ③火と光の世界

さて、上述したように「第三の原理」は「第一の原理」と「第二の原理」との交互・円還的運動の只中で「閃光」を受けたような「驚き」において性起した。この「第三の原理」によって顕示される世界が「第三の世界」である。それは「火の世界」と「光の世界」とが永遠の「内的世界 (die innere Welt)」と呼ばれるのに対して「外的世界 (die äussere Welt)」と呼ばれる。その「外的世界」は、「闇と光」とによって構成される「熱と冷」、「悪と善」あるいは「愛と怒り」との「絶えざる戦いと不和」の世界である<sup>10</sup>。

註

- 1 拙論「神の戯れ」70頁
- 2 *SEX PUNCTA THEOSOPHICA, oder Von Sechs Theosophischen Puncten*, Jacob Böhm  
Sämtliche Schriften, VI, S.8~9 または『ペーメ小論集』29頁~35頁および37頁~38頁  
参照。
- 3 ebenda, S.10または『ペーメ小論集』38頁参照。
- 4 ebenda, S.12~14, 19~20または『ペーメ小論集』40頁~42頁および49頁参照。

- 5 *Drey Principien Göttliches Wesens*, S.105
- 6 *Von Sechs Theosophischen Puncten*, S.23または『ペーメ小論集』54頁参照。
- 7 *Drey Principien Göttliches Wesens*, S.16
- 8 ebenda, S.9
- 9 *Von Sechs Theosophischen Puncten*, S.23または『ペーメ小論集』54頁参照。
- 10 ebenda, S.23～27または『ペーメ小論集』54頁～60頁参照。

## 第二節 二重の創造

さて、人間は以上のような「三つの原理」によって開かれた「三つの世界」に住む者と言われるが、上述したように、そのうち第一の「火の世界」と第二の「光の世界」とはまた「内的世界」と言われ、「第三の原理」によって顕示される世界は「外的世界」と呼ばれる。その意味において、人間はまたそのような「内的世界」と「外的世界」とをもつ二重の存在であるとも言われるのである。「内的世界」とは「火の世界」と「光の世界」とから構成される永遠の世界であり、それは「火と光」との交互転入の関係である神の「根源態」にまで遡源される。これに対して「外的世界」はわれわれが眼前に見ている夜と昼、善と悪に支配された世界であり、その世界のうちにわれわれは「外的身体 (der äussere Leib)」に従って住んでいるのである。<sup>1</sup>

確かに人間はこの地上にある限り、「内的世界」のみに生きることはできない。しかし、また人間は「外的世界」のみで充足することもできない。そういう意味において人間は内的にして外的であり、永遠にして時間的、天上的にして地上的である。このような二重性を生きる者として人間は「神の像」と呼ばれるのである。ただし、この二重性はいわゆる単なる「霊と肉」という二重性ではない。ペーメにおいては、そういう意味では人間は霊的にも身体的にも、内的にして外的、天上的にして地上的であると言うべきである。この点を明らかにするために、同じく「神の像」と呼ばれるが、単に永遠の「内的世界」のみ住む者としての天使についてのペーメの考えを先ず考究したい。<sup>2</sup>

### (a) 天使の創造

天使は神によって創造された「始まりと終り」とをもつ被造物ではあるが、それは人間とは異なる永遠の被造物である<sup>3</sup>。また「神が天使を創造したとき、ただ二つの原理のみが顕わであった」<sup>4</sup>と言われているが、その「二つの原理」とは言うまでもなく、上述した第一と第二の原理、すなわち「火と光」の原理



であり、この二つの原理のみから成る者として、天使は「神の像」と呼ばれるのである。ペーメは、このような意味での「神の像」としての天使について、その創造の原初にまで遡源して以下のように述べている。

そもそも「火」の「魔術的」性起がなければ、すべては「永遠の静寂 (ewige Stille)」のうちにあり、また「無にして無底 (Nichts und Ungrund)」である。ただし、「火」は「光」とは分けられず、この「二つの原理」をもつものとして、神は永遠から一切であり、その神以前には何も無い。それゆえ、そこから神は「根底にして無底 (Grund und Ungurnd)」であると言われる。「永遠から二つの原理があった」と言われているが、それは神的生命の「根源態」がこの「火と光」として、永遠から「根底」も「始源」もなく、すなわち「無底的」にあったことを意味する。<sup>5</sup>

ただし、そこにあるのはいまだ「火と光」との「霊的交互遊戯 (ein geistlich Spiel ineinander)」に過ぎない。この「火と光」という二つの原理が交互転動的に働く場は「神の霊の棲家 (des Geistes Gottes Wohnhaus)」と呼ばれるが、それは神が自己自身を映して見る「神性の鏡 (ein Spiegel der Gottheit)」でもある。この「鏡」に映るのは神自身の「似姿」であり、それが先ず「天使の像」なのである。<sup>6</sup>

以上のように天使は、「火と光」という「二つの原理」としての神的生命の「根源態」を映す「鏡」、すなわち「神の似姿」である。そして、まさに天使はそのような「似姿」として、「無にして無底」である神の自己投射・認識の「根底」であり、それゆえまた逆にその「根底」が言わばそのまま脱底的に「無底」であるようなあり方、すなわち「根底にして無底」としてあると言えるのである。そして、このような天使と人間の「魂 (Seele)」とは起源を同じくするものなのである。この点に関連して、次に「原人間 (Urmensch)」としてのアダムについてのペーメの考えを取り出したい。

### (b) アダムの創造

さて、天使が「神的力」からのみ造られた被造物であったのに対して、「原人間」であるアダムは大天使であったルチフェルの離反によって生じた「もう一つの創造」によって造られた被造物である。すなわち、天使は神の自己内創造において性起した「鏡」に直接映し出された「神の似姿」であった。これに対して、アダムが創造された時にはすでにルチフェルの「驕慢」によって「闇」において凝結した「外的世界」の母胎となるものが性起していたのである。ここからアダムは「二重の成れ! (das zweifache Fiat)」、すなわち二重の創造に

において創造された者であると言われるのである。<sup>7</sup>

「二重の成れ！」とは「内的成れ！（das innere Fiat）」と「外的成れ！（das äussere Fiat）」とによる二重の創造であるが、ここで注目すべきは、この創造が単に所謂「霊と肉」という対立構造においては考えられていないという点である。ペーメの場合、人間は「身体（Leib）」においても「霊（Geist）」においても二重であると考えられている。例えば、アダムの「身体」は一方では「内的成れ！」によって創造された「内的元素」に由来するが、他方それは「外的成れ！」によって「外的自然の四元素」から作られたと述べられている。また、その「身体」に吹き込まれた「息吹（Odem）」すなわち「霊」は、「火」と「光」と「大気（Luft）」であると述べられているが、そのうちの前二者、すなわち「火」と「光」とは言うまでもなく永遠の内的原理であり、後者の「大気」は地上的な外的原理である。このような二重の創造によって造られた者としてアダムは、身体的にも霊的にも二重である、すなわち内的にして外的、あるいは天上的にして地上的と言えるのである。<sup>8</sup>

以上のように、人間は自己のうちに「三つの原理」をもち、またそれによって「三つの世界」に住む者として「神の像」であると言われる。それは天使が「神の像」と言われるのとはまた違った創造の局面においてそう言われるのである。そして、人間はルチフェルの離反によって性起した二重の創造によって、天使以上の「大いなる秘密（ein grösser Geheimniß）」<sup>9</sup>をもつ者として造られた被造物である。そして、それは次章で考察する「大いなる危険（grosse Gefahr）」<sup>10</sup>に繋がる神の創造展開における「大いなる秘密」なのである。

註

- 1 *Von Sechs Theosophischen Puncten*, S.23または『ペーメ小論集』55頁参照。
- 2 ここでの叙述は拙論「神の大いなる戯れ」の第3章のそれと重なるところがあるが、「神の像」としての両者の違いを明らかにするために、再度天使と人間とについて言及する。
- 3 *Morgenröthe im Anfang*, S.67～68
- 4 *Von der Menschwerdung Jesu Christi*, S.18
- 5 ebenda, S.5～6
- 6 ebenda, S.7～8,10～11
- 7 ebenda, S.19

8 ebenda, S.20～21

9 ebenda, S.43

10 *Von Sechs Theosophischen Puncten*, S.53または『ペーメ小論集』95頁参照。

## 第二章 大いなる危険

人間とは前章で述べたように「三つの原理」をもち、二重の創造によって造られた二重の存在である。この二重の存在であるということには、また二重の可能性が含まれている。そして、それはそもそも創造の原初にあった「火と光」との交互転入の関係にまで遡源されるものであり、そこから由来するものとして天使や魂には二重の可能性が開かれていると言えるのである。その二重の可能性とは、端的に言うならば「神の僕」となるか「神から離反する者」となるかの可能性である。そして、それはそこに「すでに危険があった (war schon Gefahr.)」<sup>1</sup>と表現される根源的事態から発する可能性である。ただし、この「危険」を孕む二重性こそ神の世界創造の根源的動因に関わるものである。というのは、そのことによって、神の創造展開は新たな局面を迎えることになるからである。その第一の局面がルチフェルの離反であり、第二のそれがアダムとエヴァの楽園追放である。

### 第一節 ルチフェルの離反

天使たちは上述したように「火と光」との「靈的交互遊戯」のなかで性起した「神性の鏡」に映った「神の像」あるいは「似姿」であった。このような天使たちは「全き神性 (die gantze Gottheit)」と同様に造られた言わば「小さな神 (ein kleiner Gott)」である。すなわち、神と天使の間には、ただ天使が被造物で、その「身体的本質」が始まりをもつ以外の区別はない。彼等が造られた「力 (Kraft)」は神そのものであり、永遠から永遠にあるものである。<sup>2</sup>

さて、このような天使の中で最初に創造されたものが三大天使、ミカエル、ルチフェル、ウリエルである。ミカエルは「神の強さあるいは力」を意味し、所謂三位一体の「父なる神の性質」に応じて造られた天使であった。これに対してルチフェルは「子としての神の性質」に応じて造られ、愛において神に結合し、その核心は「光の中心」にあり、天使のなかでも最も美しい存在であった。また、ウリエルは「聖霊の性質」に応じて造られ、「光」からその名を得

た天使であった。聖霊が「光」から出て、凡てのものを形造り、凡てのものを支配するように、ウリエルの力も同様であった。これらの三大天使のなかで、何故ルチフェルが離反したのか。ルチフェルとは墮落の故にその本当の名前を失ってしまった者、すなわち「神の光からの追放者」である。<sup>3</sup>

ところで、最初ルチフェルのなかの「光」は神の子と一つのものであった。「神の核心」である「大いなる光」は、そのルチフェルのなかの「小さな光」と愛らしく穏やかに遊び、そのことによって神の核心における喜びは益々増えていった。そもそもそのために神は天使を造ったのである。ところが、ルチフェルはこのことを見て、また自らのうちに「大きな力」を感じて、「神の核心」以上に高まろうとした。ルチフェルは、自分は神以上であり、自分に比べられるものは何もないと考えたのである。このルチフェルの「高慢 (Erhebung)」、あるいは「驕慢 (Hoffart)」によって、神の「根源態」を構成する「七つの性質」は変容して、暗く冷たいものとなり神に敵対するものとなったのである。<sup>4</sup>

さて、ルチフェルはそこでは「神に対する神」「強者に対する強者」であり、神はもはや愛を以てしてはルチフェルに対し得なかった。というのは、ルチフェルはそれを軽侮し、自ら神たらんとしたからである。それゆえ、神は怒りと妬みを以てルチフェルに対抗せざるを得なかったのである。このためルチフェルの王国は暗く、荒れたものとなり、それに引き続き「もう一つの創造」が起ころねばならなかったのである。<sup>5</sup>

## 第二節 アダム の 墮 落

上述したように、アダムは「もう一つの創造」によって創造された者として当初から二重の存在であり、二重の生を生きていた。すなわち、パラダイスにあった無垢のアダムは内的にして外的であり、神的にして地上的であった。ただし、パラダイスにあっては「内的なもの」すなわち「神的なもの」によって、「外的なもの」すなわち「地上的なもの」は支配されており、アダムは神の愛に貫かれた生を生きていたのである。そこでアダムは天使とは違った次元においてまた「神の像」あるいは「神の似姿」と呼ばれていたのである。<sup>6</sup>

しかし、またアダムがパラダイスにおいてこのような二重の生を生きていたということに、また一步遡源して言うならば「二重の成れ！」によって創造されたときに「既に危険はあった」と言われているのである<sup>7</sup>。それはパラダイスにおける「内的なもの」と「外的なもの」あるいは「神的なもの」と「地上的なもの」との関係を逆転し、遂には「内的なもの」あるいは「神的なもの」

を見失う危険性である。これが神話的に「アダムの墮落」と呼ばれ、悪魔の妬みや蛇の誘惑に起因するものと言われている事態である。しかし、ペーメの場合、それは最終的にはアダムがルチフェルと同様に「主たらんとした」こと、すなわち、その「誤った想像 (falsche Imagination)」＝「驕慢」に帰せしめられているのである。<sup>8</sup>

この「誤った想像」＝「驕慢」が神的根源生命から離反する意志、すなわち「反意志 (Wiederwille)」を産むのであるが、人間は根源的にそのような「反意志」の可能性を孕んで生まれた存在として、「大いなる危険」のうちに立つ者なのである。それはそもそも天使がそうであったように、人間の「魂の根 (die Wurtzel der Seelen)」<sup>9</sup> が創造の原初にまで届いているからである。また、ペーメは「無」から「あるもの」が生まれ出る根源的動きを「魔術 (Magia)」と呼ぶが<sup>10</sup>、魂を「反意志」へと向かわしめる「驕慢」の根はこの「原初の魔術 (die erste Magia)」<sup>11</sup> にまで遡源されるのである。そのような創造の端緒に由来するものとして、魂は「無底的」であり、自由なのである。そして、そこに「反意志」の可能性が性起するのである。

### 第三節 魂の二重性

さて、「原人間」としてのアダムにまで遡源される人間の魂の二重性について、ペーメは次のように更に詳しく述べている。魂は神という「樹から由来する一つの枝 (ein Zweig aus dem Baume)」である。魂は神が自己産出あるいは自己認識するために把握した「自然の中心 (Centrum Naturae)」から生じており、「三つの原理」すべてがそのうちにある。それはそもそも「同一のものをもちたいという願望が、神の核心において目覚めた」ことに起因している。その意味において魂は「神の似姿」であり、そこに魂の根源的自由があり、また更に「すでに危険があった」と言われるのである。それは神という樹の「一本の枝」として繁茂するか、あるいは「一本の独自の樹 (ein eigener Baum)」であることを欲するかという無底的・根源的自由である。<sup>12</sup>

このような魂が置かれている根源的事態をペーメはまた「眼 (Auge)」の譬喩において表現している。魂は「神の眼」に等しい「円い球 (runde Kugel)」である。それは二つの部分、すなわち「背中合わせに立つ二つの眼」に分かれている。それは「聖なる神的な眼」と「地獄の憤る眼」とである<sup>13</sup>。この魂の二つの眼はそもそも「神の眼」が二重であることに由来している。「神の眼」は一方は「自己の前へ、静かな永遠へ、永遠の無へ、すなわち自由へ」と向い、

他方は「自己の背後へ、渴望へ」と向う<sup>14</sup>。前者の「永遠の無」あるいは「永遠の静寂」へと向う「神の眼」には何も映じない。これに対して後者の「渴望」において引き寄せられた「闇」あるいは「自然の中心」において、神は自己を捉える。そして、この「闇」あるいは「自然の中心」からすべてのもの、したがって魂も生じるのである。その際、「神の似姿」としての魂のうちへは「神の眼」の二重性がそのまま映されるのである。例えば次のように述べられている。

「おまえはおまえの魂のうちに二つの眼をもっている。それらは互いに背中合わせに立てられており、一方は永遠のなかを覗き、他方は自分の背後に自然のなかを覗き見ている。」<sup>15</sup>

ペーメにおいてはこのような魂の根源態からその無底的・根源的自由が構想され、またそこから「傲慢な悪魔 (ein stoltzer Teufel)」<sup>16</sup> となることも可能であると考えられているのである。そして、このような意味において人間は「大いなる危険」のうちにあると言われているのである。

## 註

- 1 *Von der Menschwerdung Jesu Christi*, S.42
- 2 *Morgenröthe im Anfang*, S.152,153
- 3 ebenda, S.159～163
- 4 ebenda, S.171～172,174
- 5 ebenda, S.200～2001
- 6 *Von der Menschwerdung Jesu Christi*, S.19
- 7 ebenda, S.42
- 8 ebenda, S.15,52,
- 9 *Von der Gnaden=Wahl*, S.67
- 10 *Gründlicher Bericht von dem Irdischen und Himlischen Mysterio*, S.97または『ペーメ小論集』5頁～6頁参照。
- 11 *SEX PUNCTA MYSTICA, oder Eine kurtze Erklärung nachfolgender Sechs Mystischen Puncten*, Jacob Böhme Sämtliche Schriften, VII, S.86, 93または『ペーメ小論集』140頁および152頁参照。
- 12 *PSYCHOLOGIA VERA, Viertzig Fragen von der Seelen*, Jacob Böhme Sämtliche Schriften, IV, S.62-63
- 13 ebenda, S.66～67

14 ebenda, S.84

15 ebenda, S.85

16 ebenda, S.71

### 第三章 キリストへの道

前章で述べたような危機的根源的事態にあったアダムは、ルチフェルと同様に「主たらんとした」こと、すなわちその「驕慢」によって、エヴァとともに楽園を追放されたのである。その楽園追放によって、われわれは「嘆きの谷」と呼ばれるこの世界に住むことになったのであるが、しかしここでまた「それゆえ神は人となった (darum GOtt Mensch ward.)」<sup>1</sup>と言われる新たな創造の局面が開かれる。ベーメによると、すべての創造はそもそも「神の栄光」を顕わにするためにある。それはアダムとエヴァの末裔であるわれわれ人間においては「外的なもの」を通して「内的なもの」を顕わにすることであり、さらには「地上的なもの」に死んで「神的なもの」に生きることを意味する。つまり、われわれはアダムとエヴァとともにパラダイスから苦しみに満ちたこの世界へ出て来たのであるが、「神が人となった」ということ、すなわちイエスの死と復活の出来事によって、新たな生を生きる可能性を与えられているのである。

#### 第一節 懺悔

ところで、「神が人となった」ということ、あるいは「イエスの死と復活」の出来事があったのは、われわれがわれわれ自身の力では禍に満ちた現況に活路を開くことが出来ないからである。勿論、われわれは「神の栄光」を顕わにするために「騎士 (Ritter)」の如く戦う者とならなければならない。しかし、その自らの「驕慢」によって生じた「地上的意志の力」を自分の力で破碎することはできない。そこに「イエスの死と復活」の出来事への信仰ということが語られるのである。<sup>2</sup>

そのような「キリストへの道 (der Weg zu Christo)」の一つとして述べられるのが「懺悔 (Busse)」である。懺悔はベーメの場合、「観察 (Betrachtung)」から「飢え (Hunger)」あるいは「渇き (Durst)」へと到る過程において語られている。「観察」については、自己や地上の実相を徹底的に観察し、そこに現われた神からの離反やその結末としての審判を観るべきであると述べている。

そのような「観察」を通してわれわれは自己のうちに「飢え」あるいは「渇き」を覚え、懺悔へと向うのである。<sup>3</sup>

ただし、その「真の懺悔」へと向う「飢え」や「渇き」は単に人間のなものではない。それはすべてを懺悔のために放棄し、「無」とみなす「神的飢え (göttlicher Hunger)」<sup>4</sup>であり、またその魂の「渇き」はイエスの十字架上の言葉、「わたしはかわく」(『ヨハネによる福音書』19.28)と言われた言葉に由来するものである<sup>5</sup>。すなわち、そこでは「観察」によって惹き起こされる「飢え」や「渇き」と重層的にイエスの十字架上の「渇き」が見られており、それは「飢え」や「渇き」が単に「我性 (Eigenheit)」や「自己性 (Selbheit)」の枠内から発したものではないことを意味する。それは「渇き」が最終的には「我性」や「自己性」の殻を破るような仕方でも逆説的に沸き上がるものであることを意味する。

## 第二節 放下

さて、「放下 (Gelassenheit)」とはそのような「我性」あるいは「自己性」の殻を破ることであり、またその「我性的あり方 (Eigentum)」からの根源的解放を意味するものである。ところで、その「我性的あり方」のそもそもの淵源は先に述べたルチフェルおよびアダムの「驕慢」にあった。すなわち、彼らは「自ら主たらん」として神から離反し、神の「根源態」へと入り、善悪を見極め、そこからすべてを支配しようとしたのである。そして、その「驕慢」によって「自然の中心」である「闇」のなかへ捕らえられ、「神の愛と柔和の敵」となったのである。また、彼等が入っていった「中心」から更に「驕慢」と「自惚れ」が生じ、実際は「永遠なるものの鏡 (ein Spiegel des Ewigen)」に過ぎない「理性」が、自分は単なる「鏡」以上のものであり、自分が欲することを為せば、それは「神の意志」を為すことになると考えたのである。かくして、その「理性」は益々高慢となり、神に敵対し、「神の光」から遠ざかるものとなったのである。<sup>6</sup>

ところで、その「理性」のうちにも「光」はあるが、それは「外的自然の外的光」に過ぎない。また、人間はそれをなお「神の最初の光」と考えるが、それは「自己性の自惚れ (der Dünckel der Selbheit)」である。すなわち、人間はその「理性の光」を以って「自己性」のうちへ、そして「独自の妄想 (eigener Wahn)」へと入り、再び「神の光」から離れてしまうのである。そもそも「神の光」は人間の魂のうちに輝いていた。そして、魂はそれによって



「活性化される (sich erlaben)」べきであった。ところが、「理性」はそれを「自己性」のうちへ取り込み、神に反する者となったのである。<sup>7</sup>

「放下」は以上のような「我性的あり方」からの解放を意味するのであるが、それは先に述べたようにイエス・キリストにおいて示された「神の愛と恩寵」への沈潜によってのみ可能である。そして、それは「完全に汝において無となること (gantz in dir zu nichte werden)」と言われたことであり、また欲望を神の憐れみのなかへ導き入れ、あらゆる意欲から離れ、「すべてを無とみなすこと (alles für nichtig halten)」である。そして、それは最終的には「自己性に死に切ること (der Selbheit absterben)」である。ただし、人間は常に転落の可能性をもっており、絶えず自己を「無」のうちへ、すなわち「神の前の最高の従順」のうちへと沈潜させなくてはならないのである。<sup>8</sup>

### 第三節 沈黙

ところで、イエス・キリストにおいて顕わとなった「神の愛と恩寵」へ沈潜し、「自己性に死に切る」ということは如何にして可能であるか。それは自分の意志を憎み、それを徹底して神に委ねることであると言われているが、その事態を端的に示しているのは十字架上のイエスの姿である。そして更に、それは上述した「わたしはかわく」と言われたイエスの言葉を神の「渴き」として聞くことであると言える。また、そのことによって初めてわれわれは「神の愛と恩寵」のうちへと到れると言えるであろう。さて、そのような神の愛の具現としてイエスの言葉を聞くためには、われわれは如何にしたら良いのであろうか。この点の手掛かりになるものがベーメの言う「沈黙すること (schweigen)」である。次のように述べている。

「超感覚的生 (das übersinnliche Leben)」へ到り、「神を見、神の声を聞く」ためには被造物の住まないところへ跳入しなければならない。それは近くも遠くもなく、我々自身のうちにある。したがって、ただいっときでも「意欲することと思念すること (Wollen und Sinnen)」すべてを「沈黙」させるならば、「神の語られざる言葉」を聞くことができる。それは、その「意欲することと思念すること」が「自己性」のそれであり、その「沈黙」によってわれわれのうちで「永遠なる聞くこと、見ること、語ること」が顕わとなるからである。この点については更に師と弟子との問答として以下のように表現されている。

弟子が問うた。「神が自然と被造物とを超えているとすれば、何によって私

は神を聞き、神を見るべきでしょうか」。師が答えた。「おまえが静かに沈黙するとき、おまえは、神が自然や被造物がある以前にあった、またそこから神がおまえの自然や被造物を造った、その当のものなのである。だからおまえ自身の意欲すること、見ること聞くことが始まる以前に、神がおまえのうちで、それをもって見かつ聞いていたそのものによって、おまえは聞き、また見るのである」。<sup>9</sup>

われわれはわれわれ自身の意欲によって、「神の意欲」から自らを切り離し、自分の意欲のうちばかりを見ている。また、そのことによって見ることも聞くことも「地上的なもの」で塞がれ、われわれは「超自然的なもの、超感性的なもの」へ到ることができないのである。このように「神を見、神の声を聞く」ことを妨げているのは、われわれ自身の意欲や聞くこと、見ることである。したがって、それらをすべて「沈黙」させるならば「超感覚的生」へと到り、「神を見、神の声を聞く」ことができると、ペーメは述べているのである。<sup>10</sup>

註

- 1 *Von der Menschwerdung Jesu Christi*, S.205
- 2 ebenda, S.210
- 3 *Christosophia, oder Der Weg zu Christo, Das erste Büchlein. DE POENITENTIA VERA oder, Von wahrer Busse*, Jacob Böhme Sämtliche Schriften IX, S.1~6
- 4 ebenda, S.7
- 5 ebenda, S.17
- 6 *CHRISTOSOPHIA, oder Der Weg zu Christo, Das dritte Büchlein. DE AEQUANIMITATE, oder Von der wahren Gelassenheit*, IX, S.87~88または『ペーメ小論集』240頁~241頁参照。
- 7 ebenda, S.88~90
- 8 ebenda, S.91~94
- 9 *CHRISTOSOPHIA, oder Der Weg zu Christo, Das fünfte Büchlein. DE VITA MENTATALI, oder Vom übersinnlichen Leben, im Gespräch eines Meisters und Jüngers*, Jacob Böhme Sämtliche Schriften IX, S.144, 『ペーメ小論集』268頁。
- 10 ebenda, S.144~145

## 第四章 神の道具

前章で述べたように、「放下」あるいは「沈黙」によってわれわれは新たな生を生きる可能性を与えられる。ただし、そこには常に転落の可能性が含まれており、われわれは絶えず十字架上のイエスの忍耐を以って神の御心に服従し、試練に耐えることが肝要である。また、このようにして開かれる新たな生の局面に「騎士」の如く立ち向かうことが人間の責務である。そして、その「騎士」の如く戦うことによって開かれるこの生の局面をバーメは「神の道具」となることとして展開するのである。ここではこの「神の道具」となるということ、特にバーメの魂の根源的あり方に関する叙述から取り出したい。

### 第一節 聖なる魂と神なき魂

さて、「放下」や「沈黙」によって、イエスのごとく自分の意志を神に委ねるならば、われわれはわれわれ自身の「外に (ausser)」沈潜することになる。そこでは神のみが顕わであり、働き、意志する。その場合、われわれはその意志において「無 (ein Nichts)」となる。神はその「無」となった意志のうちに、すなわち「放下された意志 (der gelassene Wille)」のうちに住む。そのことによって魂は聖化され、「神的な安息」に到る。そして身体が壊れたならば、魂は神の愛によって貫かれ、神の光によって隈なく照らし出される。この時、魂は天国にあり、「聖霊の宮 (ein Tempel des H.Geistes)」である。<sup>1</sup>

これに対して「神なき魂 (die gottlose Seele)」はそのような「放下」のうちへ自分の意志を委ねようとしめない。ただ絶えずおのれの快樂と欲望のうちへ、すなわち虚しさと欺瞞のうちへ向い、悪魔の意志のうちへ進む。このようにして魂は自己のうちにただ邪悪と、嘘、驕慢、吝嗇、嫉妬、怒りのみを抱き、自分の意志をそのなかへ没入する。このような魂は「神的な安息」へは到り得ず、神の怒りがそのうちで顕わとなる。「神なき魂」は自ら憤りのうちに捕らえられ、神の光はそのうちへ届かず、それ自身が「大いなる闇」であり、苦痛と不安に満ちた「火の原質」である。それは自己自身のうちで地獄のうちに住んでいるのである。<sup>2</sup>

以上のような意味において天国と地獄とは人間のうちにあると言えるが、今は「聖なる魂 (die H.Seele)」もそのような光や喜びを完全には感ぜず、また「神なき魂」も地獄を感じない。それは以下の状況のうちにあるからである。

先ず天国は「聖なる魂」の信仰のうちで働き感ぜられるものである。魂はそ

の信仰のうちで神の愛を感じ、信仰によってその意志を神へ委ねている。しかし、自然の生命は「肉と血」または「この世の虚しい快樂」に囲まれている。この地上にあっては世界と悪魔と神の怒りとが、「肉と血」において生命を貫き、そして「篩いにかける (sichten)」のである。したがって、地獄がそのうちで顕わとなり迫ってくる場合には魂は「不安」のうちに立つことになる。しかし、「聖なる魂」は神の恩寵と希望のうちへ自己を沈潜させ、この世が肉体の死に終わるまでは、「棘の只中の一輪の美しいバラ (eine schöne Rose mitten unter den Dornen)」としてある。したがって、魂は今キリストとともにこの世をさ迷わなければならないのである。<sup>3</sup>

次に「神なき魂」も地獄を感じてない訳ではなく、ただそれを理解してないだけである。というのは、彼は現在なお自分が好む「地上の虚しさ」を持っており、それに喜びと歡樂を感じているのである。またその「外的生命」は「外的自然の光」をもち、そのなかで魂は楽しんでおり、そこではまだ苦痛が顕わとなっていないのである。しかし、魂はその肉体が死ぬと、「外的世界の光」も消え、そのような「時間的歡樂」を享受できなくなるのである。<sup>4</sup>

天国と地獄とは以上のような仕方であれわれのうちであり、われわれがその「自己性」と「我意」に従うかどうかによって、「昼と夜」のごとく、あるいは「有と無 (Ichts und Nichts)」のごとくあるのである。このように、この世であれわれはこの両者を自己のうちにもっているが、われわれが「外的生命」に従う「外的人間」であるかぎり、そのような「靈的世界」を見ることはない。というのは、ちょうど魂が肉体に覆われているように、「外的世界」は「靈的世界の前の覆い」であるからである。しかし、「すべてが過ぎ去る (alles vergeht.)」と、「靈的世界」がその魂に従って顕わとなる。すなわち、魂はその靈的あり方に従って、「永遠なる光」あるいは「永遠なる闇」へと分けられるのである。<sup>5</sup>

この時代にあつて、キリストの国のために争い、互いに迫害し、辱め、侮辱し、中傷する者たちはキリストをまだ知っていない。まだ彼等にあつては天国と地獄とが互いに勝利を争うような姿のうちにある。しかし、その生命が争いのうちにあるのは、それが顕示され、感じられ、見出されんがためである。そして、それは「知恵」が分開され、認識され、「克服という永遠の喜び (zur ewigen Freude der Überwindung)」に仕えるためである。神は万物を「自由意志」のうちにあらしめた。それは「永遠なる支配 (die ewige Herrschaft)」が愛と怒り、光と闇とに従って顕示され、認識され、各々の生命が自分の判断を

自己自身のうちに惹き起こし覚醒させるためである。<sup>6</sup>

以上のように、ペーメはわれわれの魂の根源的あり方について述べ、最終的にはそれが神の「永遠の支配」のもとにあることを明らかにしているのである。このような魂の根源態から、ペーメの場合「神の道具」としての人間について語られるのであるが、次にこの点をさらに彼自身の言葉を通して究明したい。

## 第二節 魂のうちの小さな火花

さて、既に述べてきたように、人間の魂は一方では「光と闇とにおける神の言葉の永遠なる分開から (aus der ewige Scheidung des Worts Gottes im Licht und Finsterniß)」由来する「被造的性質」のうちにある。しかし、もう一方では魂は世界の根拠以前のところにある「神的な性質」のうちにもある。そこでは魂は「大いなる神秘のうちの一つの存在 (ein Ens im Mysterio Magno)」である。この「神性」はその墮落以前は魂のうちで顕わであった。しかし、魂がそれから自己を奪い取り、「我性」のうちへ閉じこもったとき、魂は神の怒りと呪いのもとへ置かれ、神に関しては沈黙しなければならなくなった。そこで神はイエスの名において「被造的魂」をその呪いと苦痛から救う決意をした。したがって、魂のうちには神の怒りと同時に恩寵の絆も与えられている。ただし、この「恩寵の賜物 (ein Gnaden=Geschenke)」を「被造的魂」は「自然の権利 (Natur=Recht)」としてもっている訳ではない。それは魂の最内奥の「中心」にあって、「わたしのもとへ来たれ！」と魂に呼びかけるものである。<sup>7</sup>

この「恩寵の賜物」は「魂の無底の知慾の中心 (das Centrum der Sciencz des Ungrundes der Seelen)」、すなわち「永遠なる父の意志」に帰属するものである。その「中心」においてキリストは「貧しい囚われの魂」に懇願する。というのは、魂は神の怒りに縛られ、その罪のうちで「頑な (verstockt)」となっているからである。そこでは生は死によって貫かれており、そこに「神力」を有する「善き小さな火花 (ein Gutes Füncklein)」があるかどうかを篩いにかけてられる。というのは、選ばれる者は僅かであるが、彼等はその「善き小さな火花」において「花婿の声 (die Stimme des Bräutigams)」に、すなわちキリストに聞き従うからである。キリストは彼等に「悔い改めよ、懺悔せよ、キリストのブドウ畑へ入れ！」と語っているのである。<sup>8</sup>

この「小さな火花」については「神の道具」としてのあり方に関連して、また次のようにも述べられている。「放下」、すなわちわれわれの神への全き服従

において、「神力的火花 (der Funcke der Göttlichen Kraft)」はあたかも「一つの火口 (ein Zunder)」として、アダムが「闇の石炭 (eine finstere Koble)」としていた「魂の火」のなかへ落下し、「ほのかに光る (glimmen)」。その時、「神力的光」がそこで「点火される (entzünden)」ならば、われわれは「神の道具」として進み出て、神の霊が語ることを語ることとなる。その場合、われわれはもはや自己の「所有物 (Eigentum)」ではなく、「神の道具」である。9

### 第三節 無となること

以上のような魂の根源的あり方のもとで、ベーメは上述した「放下」あるいは「沈黙」によって、「自己性」に死に「神の道具」となるべきであると言うのである。それは先にも述べたように「すべてを放棄し」、「神のうちで死に」、神のうちで「無となる」ことである。そのことによって神は私の中で「神が欲するところのもの」となるのである。また、この場合「無」は「最高の善」であると言われている。というのは、そこには何等の「混乱 (Turba)」もなく、何も私を動かすことはできないからである。そこでは実に私は私自身にとって「無」であり、私は神のものである。すなわち、私は私のものではなく、「神の道具」なのである<sup>10</sup>。

このような「放下」によって「無」となることによって、われわれは真に自由となり、万物を支配するものとなる。ベーメは次のように述べている。万物から自由となり、真に万物を支配する者となるためには、先ず万物に等しくならねばならない。そして万物と等しくなろうとするならば、「万物を放棄し (alle Dinge verlassen)」なければならない。欲望を万物から転じ、それを欲してはならない。もし、われわれが自分の欲望のうちへ何も取り入れないならば、われわれは万物から自由であり、同時に万物を支配する者となる。というのは、その場合われわれは万物にとって「無」であり、万物もわれわれにとって「無」であるからである。<sup>11</sup>

またベーメは、このような「無」となることにおいて開かれる「愛」の立場について次のように述べている。この「愛の徳」は「無」であり、その力はすべてのものを貫いている。その高みは神と同じほど高く、その偉大さは神よりも偉大である。「この愛を見出す者は無にして一切 (Nichts und Alles) を見出す」。ただし、このことを理解できるのは、われわれがすべての被造物から離れ、すべての被造物に対して「無」となる場合である。この「愛」は何ものにも比較できない。それは万物にとって「無」である。そして、それは「無」であ

るがゆえに、万物から自由である。また「愛」は「万物の始源」であり、一切を支配するものである。それゆえ、その「愛」を見出すならば、われわれはそこから万物が出てくる「根底」へと達する。<sup>12</sup>

以上のように、「神の道具」となるためには、われわれは「放下」や「沈黙」によって「無」とならなければならないのである。そして、それは根源的には「神の戯れ」、さらにはまた神の創造行為としての「神の大いなる戯れ」に参画することを意味するのである。ただし、われわれには常に転落の危険性が付き纏っており、われわれはその責務を果たすために「騎士」のごとく日々戦わなければならないのである。

#### 註

- 1 *Vom übersinnlichen Leben*, S.154-155または『ペーメ小論集』282頁参照。
- 2 ebenda, S.155または『ペーメ小論集』282頁～283頁参照。
- 3 ebenda, S.155～156または『ペーメ小論集』283頁～284頁参照。
- 4 ebenda, S.156または『ペーメ小論集』284頁参照。
- 5 ebenda, S.157～158または『ペーメ小論集』285頁から287頁参照。
- 6 ebenda, S.163～164または『ペーメ小論集』294頁参照。
- 7 *Von der Gnaden=Wahl*, S.112～113
- 8 ebenda, S.115,121
- 9 *Von der wahren Gelassenheit*, S.92または『ペーメ小論集』246頁参照。
- 10 *DE SIGNATURA RERUM oder Von der Geburt und Bezeichnung aller Wesen*, Jacob Böhme Sämtliche Schriften XV, S.111～112
- 11 *Vom übersinnlichen Leben*, S.145～146または『ペーメ小論集』270頁参照。
- 12 ebenda, S.151～152または『ペーメ小論集』278頁参照。

#### おわりに 神の楽器としての人間

以上、拙論のなかで見てきたように、ペーメの叙述・展開のなかでわれわれ人間存在のあり方を最も特色づけるものが「神の道具」という概念である。われわれは「神の大いなる戯れ」のなかにあって、その根源的創造行為に参画する者として「神の道具」となるべきなのである。そもそもわれわれの魂の根底

には「恩寵の賜物」として与えられる「小さな火花」がある。それに点火し、われわれを神の光に貫かれた者とするのは「わたしのもとへ来たれ！」というイエスの言葉である。その言葉に聞き従うためには、われわれは「放下」や「沈黙」によって「無」とならねばならない。そして、その「無となること」によって、われわれの魂の根底に開かれる境位が「神の道具」と言われるものなのである。

ところで、ペーメのこの「神の道具」となるということは、ルター的に言うならば「すべてのものに奉仕する僕 (ein dienstbarer Knecht aller Dinge)」となると同時に「すべてのものの上に立つ自由な君主 (ein freier Herr über alle Dinge)」となることを意味する<sup>1</sup>。すなわち、「無」となり、「神の道具」となるということには単なる消極的・否定的意味だけではなく、同時に積極的・肯定的意味が含まれるということである。それは換言するならば、われわれの魂の根底において全く異なる生の次元、すなわち「無底的自由」の境位が開かれるということの意味する。そして、この境位を探る手掛かりとなるものが、先の拙論でも述べたように「エゼキエルの車輪」の譬喩である<sup>2</sup>。

さて、ペーメはそもそも神を「無底」としての神から説き起こしていた。それを象徴的に言い表わすものが「エゼキエルの車輪」であり、それは先にも引用したように「あらゆる方向に進む丸い球形の車輪」であった。ただし、それは単に神の「根源態」を表わすものに終わらない。ペーメの場合、究極的にはすべてはその「無底」から出て、そこへと還る動きのなかで構想されており、人間はその動きの最果てに位置する存在と考えられているのである。人間はそういう意味で根源的な円還運動の「中心」から最も遠い「周辺」に位置すると言えるが、逆にその最周辺は最も強力に中心への力が働くところであるとも言えるのである<sup>3</sup>。というのは、人間はそもそもそのような「無底」としての神の「像」あるいは「似姿」なのであり、本論でも述べたように、神と対極に立つ可能性をもつと同時に、逆にそのような「我的なあり方」を「放下」して、「無底」としての神の「根源態」へ与る可能性をもつ存在なのである。そこに「エゼキエルの車輪」、すなわち「あらゆる方向に進む丸い球形の車輪」に譬えられるような「魂」の自由無碍なあり方の開けを看取できるのである。

ところで、またペーメの著作の中で繰り返し出てくる「戯れ」という言葉は基本的には「神の戯れ」であり、人間のこの地上における働きを全面的にこの「戯れ」と言って良い訳ではない。むしろ、ペーメの場合、悪と禍に満ちたこの世にあって、より良き世界の実現を目指して「騎士」の如く戦うのが人間の



責務であると考えられている。そこにはキリスト教的・目的論的志向に貫かれた考えがあることは否定できない。ただし、そういう目的論的志向にとっては絶えざる緊張が必然的であり、他面そこには常に転落の危険性もある。したがって、われわれは靈的にも身体的にも二重であると言われるが、そういう存在であるわれわれにはキリストとともにある信仰においてのみ歩むべき道が示されると言える。そして、そのキリストとともにある緊張の極において性起するのが「放下」であり、この「放下」＝「無となること」においてわれわれは「神の戯れ」に参加するのである。ただし、そこに開かれる生の次元は単なる人間内在的な生の次元ではない。それはもはやわれわれにとって内とも外とも言えないところであり、換言するならば内在にして超越、あるいは超越にして内在必とも言うべき生の次元である。そして、魂の根底に開かれるそのような生の次元を象徴的に言い表わすものが上述した「エゼキエルの車輪」、すなわち「あらゆる方向に進む丸い球形の車輪」であり、それは目的論的志向に動かされるキリスト教的生とは異質の生のあり方を示していると言えるのである。

さて、最後にこの「神の道具」となるということはまた神の「楽器 (Instrument)」となることであるとも言われる。例えば、神の創造行為は「リュートの演奏 (Lauten-Spiel)」<sup>4</sup>に譬えられる。本論で述べたように、そもそも神は神自身の「大いなる喜びと栄光のために」すべてを創造した。すなわち、すべては神自身のうちの「靈的戯れ」に発し、その「戯れ」の「道具」として造られた。その「戯れ」が「リュートの演奏」に譬えられ、そこから神の創造は本来「多彩なりュートの演奏の大いなる調和」としてあると言われる<sup>5</sup>。したがって、そこではわれわれはまた「神の僕」として、「神の弦楽器演奏」における「一つの鳴り響く弦」となるべきであるとも言われるのである<sup>6</sup>。また、ペーメはその臨終の床にあって息子に「あの美しい音楽 (die schöne Music) が聞こえるか？」と尋ねたと言われている<sup>7</sup>。この世の軛を離れ、天国へ迎え入れられるということはまさに神の奏でる妙なる音楽と一つになり、神の創造行為である「戯れ」の世界へ還っていくことを意味するのである。そして、そこにおいて初めてわれわれは真に自由無碍の世界に生きる者となるのである。

以上、「神の道具」としてのペーメの人間観を考究した。それは先に論述した「神の戯れ」としての神の根源相、および「神の大いなる戯れ」としての神の根源的創造行為から見られた世界論と合わせて、ペーメの神・世界・人間に関する考えを特に「戯れ」という言葉を中心に解明する試みである。ペーメの

思想は、ドイツ神秘主義思想の流れのなかにあつて、特に人格的、すなわち三一神的神以前の神を徹底して掘り下げるものとして際立った特徴を示している。その根源的思索力・構想力は他のドイツの神秘主義思想家以上の深みとダイナミズムを有している。それはキリスト教的思索に徹底して内在的であることを通して、それとは異質の宗教的生とも触れ合う根源的宗教的生の本質を顕わにするものと言える。

## 註

- 1 Luther, Martin, *Von der Freiheit einens Christenmenschen*, Reclam,. S.125
- 2 拙論「神の戯れ」55頁および「神の大いなる戯れ」29頁参照
- 3 F.W.J.Schelling, *Philosophie und Religion*, Schellings Werke, Nach der Originalausgabe in neuer Anordnung herausgegeben von Manfred Schröter, Vierter Hauptband, S.32  
ここでシェリングは、絶対者から最も遠い点にある「自我性 (Ichheit)」の位置づけを、太陽系の中心から最も遠いところにある惑星に譬えている。そしてその最も遠い点は絶対者 (中心) への還帰の時点でもあると述べている。シェリングのこの著作は彼が哲学と宗教との関係を如何に考えているかを知る手掛かりを与えてくれるものとしても貴重である。
- 4 *Von der Geburt und Verzeichnung aller Wesen*, S.4
- 5 ebenda, S.231
- 6 ebenda, S.226~228
- 7 *DE VITA ET SCRIPTIS JACOBI BÖHMII oder Ausführlich erläuteter Historischer Bericht von dem Leben und Schriften des teutschen Wunder-Mannes und hoherleuchteten Theosophi, Jacob Böhmens*, Jacob Böhme Sämtliche Schriften, X, S.21